

史遊会通信

NO. 184
平成22年
2月12日
発行

事務局
☎
03-3712
0651
下山田方

一月講演要旨

釵頭鳳

森下征二

陸游、字は務観、放翁と号した。越州は山陰（現・浙江省紹興県）の人。南宋の代表的な詩人で、詞人としても名高い。清の乾隆帝が「唐宋詩醇」を編纂した際、唐の李白、杜甫、韓愈、白居易と並ぶ宋代詩人の大家として、蘇軾（東坡）と共に挙げたのが陸游である。

彼には、別れた妻との間に、悲しくも口マンチックな逸話がある。陸游は、そのやせせない気持を、「釵頭鳳」と言う詞の中で切々と詠いあげた。既に語り尽くされている感じもするが、私なりに振り返ってみることにした。

さて、陸游が最初の結婚をしたのは、彼

が二十歳の時であった。相手は、母の唐氏の姪に当たる唐琬である。従兄妹同士の結婚なので、唐氏の意向で纏められた可能性が高い。

二人の仲は睦まじく、何時までも幸せな生活が続くように見えた。しかし、蜜月は短かった。結婚後直ぐ、唐氏と唐琬の間がこじれてしまったのである。昔から、嫁と姑の関係は難しいが、二人はそれでも叔母と姪である。何故、うまく行かなかったのだろうか？ 様々な理由が考えられるが、何れにしても、生木が裂かれるように別れさせられたと言う。

ところが、陸游も黙ってはいない。別れ

例会のお知らせ

◎ 2月例会

日時 平成22年2月24日（水）

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 平山善之氏

テーマ 「千葉一族」

自由執筆は隆恵・中山喬央・鍋屋

次郎の諸氏。締切りは2月末。

◎ 3月出版祝賀会

日時 平成22年3月22日（月・休）

12時～

会場 学士会館

会費 7千円

出欠のご返事は、同封のはがきにて

お願いいたします。

3月は通常の例会はありません。

自由執筆は高橋由貴彦・新井 宏

松川博光の諸氏。締切りは3月末。

た妻を別宅に隠し、母親の目を盗んで通い続けた。しかし、そんなやり方が長く続くはずがない。やがて、唐氏に気付かれてしまった。怒り狂った彼女が別宅へ乗り込んで来る寸前、先回りした陸游がやつこのことで、唐琬を別の場所に隠したこともあったようだ。

所詮、無理は続かない。やがて完全に別れた二人は、それぞれ別々の相手と結婚する。唐琬は皇室の血筋を引く趙士程の妻になり、陸游は王氏を娶って次々と子供を作り続けた。因果なことに、それでも二人は相手を忘れられなかったのである。

そうになると、運命も又、とんでもない悪戯をする。彼らが別れた十年後、紹興の富豪・沈氏の庭園で、二人は偶然に出会ってしまう。勿論、当時のことだ。二人が声を交わすことは出来ない。互いに目礼だけで別れたようだ。

しかし、その後があった。唐琬が夫に陸游との経緯を話し、人を介して酒肴を届け、陸游を慰めてきたのである。実はその時、陸游は科挙に落第した痛手を引きずって、非常に落ち込んでいた。思いがけなく出会った前妻の情けに、過ぎ去った幸せな日々

を思い出し、やるせない気持ちに苛まれたとしても無理はない。

しかも、彼は詩人であった。激しい想いを、胸の中に仕舞っておけない。想いの丈を、沈園の壁に一気に叩きつけた。それが陸游の「釵頭鳳」である。この詞は、広く人々に語り継がれ、やがて唐琬の耳にも入った。陸游の愛情を改めて確認した唐琬は、同じ詞牌の詞を作り、陸游へ返したと言われている。

しかし、悲劇は続いた。彼女は程なく病に罹り、陸游を慕いながら、怨みを含んで死んでいった。彼らの切ない恋は、中国のロメオとジュリエットとして、人々の胸の中で永く生き続けたのである。これが、現在の通説である。

しかし……と、私はここで一旦立ち止まらざるを得ない。一息入れて、考え込まざるを得ないのである。

愛する男女が生木を裂くように引き裂かれる時、女性の死によって、二人の愛が完結するという話は、余りにもありふれている。それは、男の勝手な願望を表わすものであったとしても、現実の話ではないのではないか？

それに、沈園での再会は、二人が別れて十年もたっている。再会までの十年間、唐琬は陸游を、ただ一途に想い続けたと言うのだろうか？ それは彼女も、心の底で秘かに愛していたかもしれない。しかし、毎日泣き暮らすほど、思いつめたことはないのではないか？ 彼女にも、日常生活があったはずだし、人間には「馴れ」があるのだ。たとえ、一時は思いつめても、次第に落ち着きを取り戻し、熱病のような恋も変質するのが当然だ。再会後の彼女が、陸游を生娘のように思いつめ、遂には死に至ることなど、起こるはずがないと思う。

それでは、彼らが離婚した原因や、沈園での再会をめぐる真実は、本当はどのようなものだったのか？

私はそれが、この「釵頭鳳」と言う詞の中に隠されていると思っている。これは、私の直感のなせる業である。そこで、私は改めて「釵頭鳳」と言う詞を考えてみることにした。

一般に、「詞」を単純に言えば、曲に合わせて作られる替え歌の、歌詞のようなものだと言っている。詞が付けられた曲の名を「詞牌」と言うが、同じ詞牌を持つ「詞」

は、幾つもあるのが普通である。「全宋词（宋词一万九千首以上を収録）」を紐解けば、「木蘭花」は三一〇首もあるし、「浣溪沙」は実に二八五首を数える。

それでは、「釵頭鳳」はどうか？ これだけ、有名になった曲である。付けられた詞は沢山あるのではないか？ しかし、予想は見事に覆った。私の目に触れたのは、僅か、秦觀・陸游・唐琬・史達祖が作った四首である。このうち、陸游より後世の史達祖を除外すると、二人のほかには、秦觀の詞だけとなる。

面白いことに、この秦觀は二人と密接な関係があった。唐氏は、娘の時から秦觀に深く傾倒していたのである。今で言うファン以上で、「追っかけ」と言う呼び方がふさわしいかもしれない。彼女が陸游の名を、秦觀の字の「少游」から付けたことは、よく知られた事実である。

ところで、ここで触れる余裕はないが、唐琬の詞は、後世の偽作であるというのが通説になっている。そこで私は、秦觀と陸游の「釵頭鳳」を比較することにより、この間の経緯を探ることにした。

結論から言おう。秦觀の詞は、百年後の

陸游や唐琬の時代には、既に曲に合わなくなっていた。何故なら、曲は時代とともに微妙に変わり続けるからである。もしも、それに気がついた唐琬が、その事実を、秦觀にぞっこん参っている唐氏へ告げたらどうなるか？ 二人の間が険悪になるのは、火を見るよりも明らかだ。

私はそこに、彼らの不和の原因を見た。詳しくは、今度発行される史遊会のエッセイ集を、ご覧頂きたい。

ところが更に、私の結論を補強するもう一つの事実がある。それは、「釵頭鳳」と言う詞牌が、晁補之と言う人物の、「擷芳詞」と言う詞から名付けられたと言うことだ。晁補之とは何者か？ 彼は何と、唐氏の祖母の一族である。

既に述べたように、「釵頭鳳」と言う詞牌は極めて少ない。唐氏や唐琬が、秦觀の数多い詞の中から、「釵頭鳳」をわざわざ取り出して論争した背景には、それが、晁補之の詞に因んだものだったからではないかと思う。

最後に、晁補之の「擷芳詞」を掲げ、締めくくりとしたい。

擷 芳 詞

風搖蕩	風 搖蕩として
雨濛茸	雨 濛茸たり
翠條柔弱花頭重	翠條柔弱して花頭重し
春衫窄	春衫 窄く
香肌濕	香肌 濕れたり
記得年時	記し得たり 年と時と
共伊曾摘	嘗て共に（青梅を）摘みしを
都如夢	すべては夢の如く
何曾共	嘗て共にせしは何ぞや
可憐孤似釵頭鳳	憐れむべし 孤り釵頭鳳に似たり
関山隔	関山 隔たり
晚雲碧	晚雲 碧し
燕兒來也	燕兒 來たるも
又無消息	又消息なし

以上

自由執筆

日本語が瘦せてきた

鯨 游海

もう十年以上も前のことになろうか。当時東大の総長が入学式だか卒業式だかの祝辞で「鶏口となるも竜尾となる勿れ」とか発言して翌日、天声人語氏に「鶏口なら牛後、竜頭なら蛇尾」と擲論されたことがあった。言わんとすることは判るし、単なる記憶違いか言い間違いなのだが、最高の知識人の象徴ともいべき人の公式の場での発言だったので、江湖にちよつとした物語を醸してしまった。故事成語等を引用する場合に辞書等での確認が肝要で、うろ覚えの記憶に頼るのは避けたいものである。多くの人が間違える字に「浅学非才」がある。正しくは非ではなく非で「薄い」の意味。「浅い学問と非い才能」とで対語となりバランスが取れる。片方が少しは有るのに、もう一方が非(ゼロ)では安定しない。おそらく常用漢字に非が無く、非で代用したのが慣例化したのだらうが、原典の意味まで変えてしまつては著作権の侵害、濫(乱)用だ。

「喧喧譁譁」と誤用する人も多い。「喧喧なら驚驚」「侃侃なら譁譁」が正しいのみならず、両者は意味が両極だ。前者は「各人が無秩序にワイワイガヤガヤと騒がしく言い争うさま」で少なくとも褒められた状態ではないのに対し、後者は「各人が秩序正しく正論を堂々と議論し合うさま」、又「和らぎ楽しむさま」で褒め言葉である。そもそも侃は①強く正しい②和らぎ楽しむの意で「つよし」と調んで人名にも登場する。譁は正論を直言するの意。これに対し喧も驚も①騒がしい②かまびすしい意味で擬態語でもある。本来、交わるべからざる語句同志なのだ。

よく目にする「波乱に満ちた展開……」という文章にも違和感を持つ。乱は濁ではなかったか。辞書に濁は「波、大波、小波」とあり、波濁と二字組合わせると波のほか転じて「騒ぎ、もめごと」の意が生じる。こうなると乱でもいいのか？ 果たして「現代表記では乱も可」とある。しかし乱と濁とは意味が全く異なる。私はやはり「波瀾万丈」と書く。豊かな日本語が瘦せてしまわないように。

さて、このように誤用例を挙げるとキリが無い。元より言葉や文法、文字や用法が

時代と共に変化してゆくのは当然で、平安時代と現代とは文法も文章も、文字も用語も大きく異なるのは自然のなりゆきである。然し変化には良きものと悪きものがある。良き例として龜の字が龜に、獻が獻に簡略化され、どれ程助かった事であらうか。反面、突が突に(犬が突然飛び出てきたのが大となつてしまった)、假が仮に(反はハンかヘンで力の訓みはあり得ない。休暇、霞を休暇、震とは書けない)等は新字体の悪しき例である。ついで乍ら大旨日本語の新字体は良く出来ているが、新中国の簡体字はいただけでない。漢字本来の持つ良さや意義が殺されてしまっている。更には抜き言葉や敬語、丁寧語の正しい使い方を若者達に教え、指導していかねばなるまい。折から常用漢字の制限が一部緩和されるといふ。大歓迎だが文化省や経産省の素人官僚に任せておくと後世に禍根を残すことになる。今を生きる私達の責任は重い。世を挙げて英語の世紀という。西洋の衝撃を受け、豊かな近代文学を産んできた日本語が亡びかねない。然し世界はダイバーシティ多様であつて面白い。東洋の一画からユニークな漢字文化圏の知的言語として存在感を増すことこそが人類への貢献だ。

自由執筆

坂本龍馬斬殺秘話

太田 精一

坂本龍馬斬殺は、幕末史のミステリーとして、未だに真相は藪の中である。

慶応三年（一八六七）十一月十五日京都河原町の醤油屋、近江屋の二階で、土佐藩脱藩浪人坂本龍馬と中岡慎太郎が斬殺された。

誰が、何のために、どんな組織の力が働いて龍馬を斬殺したのか、これまでにいろいろと研究されてきた。

だが、いずれも証拠にもとづく決め手に欠き、憶測の域を脱していない。

斬殺された当初は、新撰組の原田左之助たちの仕業であるとの証言がもたらされた。それをもとに土佐藩と海・陸援隊が探索し、黒幕は伊呂波丸事件で龍馬に苦汁を飲まされた紀州藩公用方三浦休太郎であるということになり、報復のため、同人の止宿する天満屋を襲った。

伊呂波丸事件とは、紀州藩の御用船明光丸が、土佐藩の伊呂波丸と衝突伊呂波丸が

沈没。龍馬が交渉して紀州藩から多額の賠償金を支払わせた事件である。

襲撃のあることを察知した三浦休太郎側では、新撰組にも応援を頼み、陸奥宗光率いる海援隊や土佐藩士などの斬込み隊を迎え撃った。

その後、事件の解明が終わらないまま、鳥羽伏見の戦いから戊辰戦争へと戦乱が続き、有力な手掛かりとなる人物が戦死し、証拠も発見されなかった。

だが、函館戦争終了後、賊軍として捕らえられていた、かつての京都見廻組与力頭今井信郎が、組頭の佐々木唯三郎と自分を含む七人で、龍馬を斬殺したと自供した。

彼の供述によれば、二階に踏み込み殺害に及んだのは、渡辺吉太郎、高橋安次郎、桂隼之助で、土肥伸蔵、横井大三郎、今井信郎は台所で見張り、佐々木唯三郎は二階の上り口にいた、という。

しかし、その後、龍馬を切ったのは、今井自身ではないかとする説が浮上してきた。榊原健吉門下で、直心影流を学び、講武所の師範代となっている今井信郎を除いては、北辰一刀流の遣い手であり、常時拳銃を所持している龍馬を、瞬時のうちに倒すこと

はできないというのである。

幕府保守派にとつては、龍馬は、好ましからざる人物であった。薩長同盟を成立させ、大政奉還を献策し、徳川を一有力大名に格下げしてしまう龍馬は、許し難かったに違いない。

今井信郎の供述によつて、龍馬殺害の実行は、見廻組と確定した。今井は、裁判にかけられた。西郷隆盛などの助命運動によつて、死刑は免れ、静岡藩へ引渡し、そこで禁固されることとなった。だが、翌々年の明治五年の一月には、特赦によつて出所している。

西郷隆盛が、助命に走ったことから薩摩が、陰に廻つて竜馬を暗殺させたのではないかとの憶測も飛びかった。

龍馬は、薩摩にとつても倒幕運動の邪魔者であり、この世から消えて欲しい人物であったのだ。

今井信郎は、その後、キリスト教徒となり、静岡県初倉村の村長として活躍した後、大正七年六月二十五日七十八歳の天寿を全うした。

坂本龍馬殺害については、公には一切口を噤んだまま語らなかつた。

自由執筆
三多摩民権運動、探索

松川 博光

東京近郊の散歩ロードとして、羽村の玉川上水堤、五日市の秋川溪谷、町田の野津田が知られているが、かつて、これらの地域は三多摩民権運動の舞台であった。

北、西、南多摩郡は明治になり、神奈川県に属していた。三多摩は土地が豊かで、気候的にも恵まれ、経済的自立が可能だった。この地方の豪農は経済的自立を背景に、政治的自立の道を模索、自主的な民権運動が特色であった。石坂昌孝（鶴川村、地主・戸長）、指田茂十郎（羽村、地主）らの豪農によって、運動はひらかれた。

指田家は代々、玉川上水の水番役であった。明治のはじめから東京府の水源地として、行政管轄の変更が主張されていた。明治二十二年甲武鉄道が八王子まで開通、多摩地方は東京府との結びつきを強め、これが移管への動きを促進。三多摩地域の神奈川県から東京府への移管が、行政、政治的要因で議決された。

『大菩薩峠』の作者、中里介山は現、羽村市で生まれた。生家は上水取水堰の近くにある。介山は三多摩壮士を輩出した政治的風土に影響を受けている。直接的には家族の没落、貧困、二度の失恋によって、無常感、宿業感をもち、小説に反映された。

五日市憲法草案は民主的な内容で有名である。八十六条は「民権議院ハ行政官ヨリ出セル起議ヲ討論シ、又国帝ノ起議ヲ改ザンスルノ権ヲ有ス」とあり、欧州小国の憲法を参考にしている。五日市は木炭と木材と黒八丈という絹織物が主要産物で栄え、民権運動の拠点でもあった。東北地方の元藩士が旧幕天領の多いこの地域に進出、知識層として教育活動を行った。この憲法草案の起草者、千葉卓三郎もその一人であった。彼は宮城県志波姫出身である。

民権運動はその後、石坂昌孝の影響下に集まり、村野常右衛門（鶴川）、吉野泰三（三鷹）、中村克昌（調布）、深沢権八（五日市）等が主な人物である。自由党は明治十七年解党。大井憲太郎、星亨系の関東自由党へ石坂は歩み寄った。自由党解党を不服として、地方の少壮民権家たちを主体とした朝鮮改革運動（大阪事件）への潜

行。多摩地方の運動家は資金調達役、武器製造役を担当。この時、大矢正夫は資金強奪に北村透谷を勧誘、透谷はその誘いを断り、政治青年から文学青年になった。

三多摩壮士は議会の院外団として活動し、又条約改正問題でも活躍する。福岡玄洋社の来島恒喜は大隈外相の改正案に反対の為、爆弾を投げつけ、大隈の片足を失わせた。この時、使われた爆弾は大井憲太郎と頭山満の縁で、大阪事件で作られ、三多摩壮士が所持していたものを、来島が入手している。

三多摩政党人は三多摩壮士の名によって、不屈の気概と力との持ち主として世間に知られた。三多摩民権運動の歴史は、日本近代化の一コマで、文明開化による富国強兵、殖産興業に貢献している。

又一方では、民主的伝統の継承からみると、大正、昭和デモクラシーを支える、社会民主主義的路線への橋渡しを果たしている。護憲運動、普通選挙運動に水脈としてつながっているが、軍国主義化の風潮に対する抵抗は弱かった。

自由執筆

古韓尺で作られた纏向建物群

新井 宏

この小文は、「会員の活動」の欄に、論文掲載の紹介として、ごく簡単に載せるつもりで書き始めたものである。しかし、「纏向遺跡の古韓尺」の興奮状態が尾を引いて、だんだん長文のものになってしまった。それならというわけで、ついでに書きたいことを付け加えて、自由執筆ということにする。でも下山田さんから「予定外です」と云われそうだが……。

大和書房の『東アジアの古代文化』が昨年一月一三七号を以って終刊となった。歴史・考古学の分野では、三十五年間も総合ジャーナルの役割を果たしてきた良質な雑誌であったが、主催者大和岩雄氏の健康上の理由とのことであった。

私も、ここ数年、長文の論考を三編ほど載せていただき、その縁で『理系の視点から見た考古学の論争点』も大和書房から出していたので、非常に残念であった。

純然たる学術論文なら研究誌に載せれば

良いが、タイミングを要するジャーナルな話題は、迅速に、かつ意見を交えて述べる方が書きやすい。

さあ、どうしようか……。そして、選んだのが梓書院の『邪馬台国』である。

この雑誌も既に百号を越え、三十年の伝統を誇っているが、当初から「邪馬台国北九州説」を標榜していて中立性に欠けるため、距離をおく専門家も多い。しかし、掲載論文の中には、評価すべきものも多くあり、テーマによっては季刊という迅速性が何よりも嬉しい。

そして「古韓尺で作られた纏向大型建物群」尺度が語る年代観と高句麗との関連」という論文を今年一月号に載せることにしたのである。

前置きが長くなったが、書きたいのは、ここからである。

昨年十一月、奈良の纏向遺跡で、早期古墳時代の大型建物群が発掘され、「卑弥呼の宮殿か」と話題になったことを記憶して居られるであろう。実は、それに関連して「大変なこと」を発見し、それ以来ずっと興奮状態が続いているのである。

「大変なこと」とは、纏向の大型建物群を

初めとして、この地域にある最古の古墳群、すなわち纏向型古墳群が全て「古韓尺」にドンピシャリ適合したのである。纏向の大型建物群は、規則的な配置に加えて、桁行や梁行の柱間も正確に判明しており、尺度を議論するには、最古で最良な資料である。その建物群が周辺の纏向型古墳を含めて、筆者が二十年以上も提唱してきた「古韓尺」に完璧に一致したのであるから、筆者の興奮ぶりもお判りいただけよう。

しかし、この発見は計量史上のマイナーな成果にとどまらない。古墳時代早期から既に高句麗に起源をもつ「古韓尺」が使われ始めており、中国系の「漢尺」とか「魏尺」とか「晋尺」が使われていなかったという「事実」は、前方後円墳の起源や邪馬台国論争の論議に重大な影響をもたらすのである。

すなわち、従来から有力であった「前方後円墳の起源は高句麗の前方後円形積石墓」とする学説が一気に力を得て、「誤った炭素十四年の適用」によって、古墳時代の始まりを百年も繰り上げつつあった日本の考古学界に、大ブレーキをかけることになるのである。それは必然的に、箸墓を卑弥呼

の墓とするような乱暴な議論の終焉を意味する。

これらの内容は、当然、学術論文として発表すべきものであるが、その場合には、査読を経て、刷り物になるまでに、通常一年近くもかかる。そのためにとりあえず直ぐに刷り物になる『邪馬台国』に載せることにしたのである。学界への発表は、三月の大阪大学における「情報考古学会講演会」で行い、正式論文は『計量史研究』に載せる予定である。

ついでに紹介すれば、この論考を最初に発表したのは、会員の鯨遊海さんが主催する「鯨会」の十一月例会であり、続いて「東アジアの古代文化の会」十二月講演会では、二時間以上にわたって、たっぷりと独演した。いずれも手ごたえ十分で、お酒が美味しかった。

最後に、「会員の活動」に戻る。
最近『邪馬台国』に掲載した論考は、次号分も入ると八論文あり、合計すると一三八頁になる。これらの論考によって「歴博の炭素十四年による年代遡上論」が完全に間違っていたことを明示できたと思っ
ている。お読みいただければ有難い。

百号(二〇〇八・十二)：歴博の炭素十四年をめぐる論理矛盾

百号(二〇〇八・十二)：三角縁神獸鏡の微量成分問題(再論) — 泉屋博古館の「釈明」も重大な誤り —

百一号(二〇〇九・四)：歴博プロジェクト『弥生農耕起源』について — 炭素十四年による年代遡上論の問題点 —

百一号(二〇〇九・四)：木材年輪年代をめぐって — 基準パターンと照合ミスの

確率 —

百二号(二〇〇九・八)：歴博「古墳出現の炭素十四年代」について

百二号(二〇〇九・八)：炭素十四年代測定の正年代(暦年代)早見表

百三号(二〇〇九・十)：炭素十四年における二重基準の問題

百四号(二〇一〇・一)：古輪尺で作られた纏向大型建物群 — 尺度が語る年代観と高句麗との関連 —

事務局だより

※新入会員の紹介

▽村上邦治氏

生年月 昭和十九年十二月生

住所 松戸市幸田 五一六五

勤務 青木あすなろ建設(株)

興味あるテーマ 日本古代史

紹介者 中込勝則・中山喬央両氏

※総会報告

▽21年度収支決算報告の承認

▽エッセイ集出版に関連して

*題名：『歴史のみち草』

*出版社：彩流社 定価二八〇〇円+税

*2月中に出版予定

*執筆者負担30冊+贈呈3冊

*出版記念祝賀会

3月22日 学士会館

※22年前期の例会担当者は左の通り

講演 執筆

1月 森下征二 鯨・松川・太田

2月 平山善之 隆・中山・鍋屋

3月 出版祝賀会 高橋・新井・松川

4月 佐藤健一 島津・森下・千坂

5月 瀧澤 中 相原・中込

6月 中山喬央

7月 柴田弘武